

台湾の大学における日本語教育の沿革に関する一考察 —特に第二次大戦後に焦点を当てて—

陳 麗 華

Japanese Language Education Policy at University in Taiwan —History, Status Quo and Prospect

CHEN, LEE-HWA

abstract

The Japanese language education in overseas territory started, first time in history, in Taiwan as a national policy. It is already over a century since then. For the initial 50 years, the Japanese language education was made as a colonial mother tongue.

In the beginning of next 60 years, the Japanese language education has been suppressed by Taiwan government until Taiwan is democratized and the Japanese language education in Taiwan is normalized. On the contrary, due to the recovery and the prosperity of Japanese economy after World War II, Japanese language education has been wide spread all over the world, and currently enormous number of people are studying the language.

The purpose of this paper is to examine the change, the status quo, and the prospect of Japanese language education policy at university in Taiwan.

1. はじめに

台湾に洋式学校が建てられたのはオランダ植民地時代（1613～1661年）にまで遡る。しかし、西洋式のミッションスクールは主に伝道が目的であり、また、後に台湾巡撫劉銘伝が1887年に建てた洋式学堂「西学堂」のカリキュラムは、当時としては先進的であったものの、劉の失脚によって1892年に廃止されてしまった¹⁾。今日に続く近代的教育制度は、

平成18年6月29日 原稿受理

大阪産業大学 教養部非常勤講師

1) 『台湾歴史辞典』デジタル版より、台湾行政院文化建設委員會國家文化資料庫。

日本の台湾統治時代（1895～1945年）に実施された様々な政策の中で導入されたのが始まりであった²⁾。伊沢³⁾というアメリカ帰りの学者が台湾統治の最初の年（1895年）に学務部長の肩書きで赴任し、教育制度を確立するキーパーソンとなった。伊沢は着任早々国語伝習所を設立して、日本語教育を開始した。これは海外での日本語教育のさきがけであり、すでに110年が経過している。植民地であった台湾に対して、日本は初等教育を重点的に実施した結果、1944年時点での台湾人の初等教育⁴⁾ 就学率は70%を超える⁵⁾ 高水準となっていた。教授用語は日本語を使用していたので、日本の統治時代の日本語理解率も就学率とほぼ同等の水準にあったと言えよう。また、広さが九州ほどしかないこの地は、多民族、多言語の世界であり、日本語は意思疎通の手段となった面もあった⁶⁾。植民地統治が終わり、社会状況や政治体制が変わっても、台湾の日本語教育が絶えることなく今日まで持続してきたことは、地理的、歴史的、そして経済的に台湾と日本が一衣帯水の関係にあったからだと言えよう。

本稿は植民地統治終了後の60年間において、総合大学、専科大学、5年制高専を含む台湾の高等教育機関⁷⁾ で実施されてきた日本語教育に焦点を当て、その動向をマクロ的に観察したうえで、近年のカリキュラムに見られる傾向をミクロ的に分析を試みたものである。標題の「大学」とは高等教育機関の総称として用いている。

国際交流基金の調査データをみると、日本語学習者の7割以上はアジア⁸⁾ の人びとが占めており、その中でも台湾は常に上位⁹⁾ を保っている。人口2300万人の台湾で、日本語学習者が約13万人いることを考えると、日本語はもはや植民地時代の名残ではなく、世代交代を経て、積極的、自主的なモチベーションのもとに学習されていると言えるだろう。

2) 阿部宗光・阿部洋編, [1972年], 『韓国と台湾の教育開発』, アジア経済研究所, p.201。

3) 伊沢修二 (1851～1917) は1895年に6人の教師を引率して渡台し、台北郊外芝山巖で「国語教育」として日本語教育を始めた。

4) 1896年に国語伝習所から1898年の公学校、更に1941年の国民学校へと呼び方を数回改正したが、そのカリキュラムは台湾人に対する初等教育であった。

5) 若林正文著, [2001年], 『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』, ちくま新書, p.46。

6) 鍾清漢著, [1993年], 『日本植民地下における台湾教育史』, 多賀出版社, pp.319-320。

7) 台湾では総合大学を「大学」、専科大学を「学院」、5年制高専（16～20才）を「専科學校」と称する。

8) 『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2003年—（概要版）』によれば、台湾の日本語学習人口は韓国、中国、オーストラリア、アメリカに続いて第5位である。

9) 同上調査。日本語学習者の人口に対する割合をみると、韓国が53人に1人で第1位であり、オーストラリアが52人に1人でこれに続き、台湾は第3位で179人に1人である。

2. 日本語教育の定義と歴史

日本語教育と国語教育は、共に日本語が研究対象及び指導内容であることは言うまでもないが、両者は教育を受ける側が日本語を母語としているか否かで区別される。野田は日本語教育というのは日本語が母語でない者に対する指導であり、そのため、現代日本語を中心とした内容が特徴であると指摘している¹⁰⁾。従って、指導する側にとっても、国語教育と日本語教育には当然違いが生じる。日本における第二次大戦後の日本語教育は国際交流、日本文化の宣揚を旨としてきた。60年代初めに設立された日本語教育学会は、外国人への日本語指導方法の研究を主な設立の目的としていたが、日本の技術発展、経済成長が国際社会における日本語の需要を高め、国際交流基金が1972年に設立されると、この学会は日本語教育やこれに関連する研究を一段と発展させ、他国と相互理解を進めるための活動にも力を入れるようになった。

一般に日本語教育の嚆矢は19世紀末の台湾統治の開始とともに始まったという説が定着しているが、実際には16世紀半ばにまで遡ることができる。布教のために日本に渡って来たイエズス会の宣教師たちは自ら積極的に日本語を学習して、著書や辞書などの史料を残しており、この時期は日本語教育の黎明期と言われている¹¹⁾。しかしこの当時、日本語教育の研究はまだ行われていなかった。一方、日本語教育が皇民化などの目的のもとに、国家的事業として初めて海外で実施された場所が台湾であった。その時代には国語教育と呼ばれたが、これはあくまでも宗主国の立場からの主観的な用語であり、台湾人にとっては事実上、学習を強制された言語であった。しかしいずれにせよ、台湾は日本以外で実施された日本語教育の発祥地であったことは疑いようのない事実である。

80年代に入ると、日本は経済、技術などの発展により先進国の仲間入りをしていた。世界各国、とくにアジア圏では、日本とのビジネスの機会が増え、さまざまな面で日本の能力が評価されるようになったので、日本語学習がブームとなった。一方、1983年に文部省(現文部科学省)が「10万人留学生政策」を打ち出したのがきっかけとなり、日本国内の高等教育機関でも積極的に留学生を受け入れはじめた。そのため日本語教育政策はますます整備され、留学生向けのカリキュラムが充実するようになった。教材は多様化し、日本語学習に役立つプロジェクトがつくられ、関連するさまざまな日本語教育も進展していっ

10) 野田尚史著, [2003年], 「日本語教育は日本語研究にどのように寄与しているか」, 『国文学解釈と鑑賞』, 68巻7号。

11) 関正昭・平高史也編, [1997年], 『日本語教育史』, アルク出版。

た。日本における大学の門戸開放により、それまでの大学院生中心の留学から、学部学生の留学も増えていった。台湾では5年制高専や2年制専科学校の卒業生が、日本の大学の学部に編入できることになったため、留学の選択の幅が一層広がった。

3. 台湾の高等教育における日本語教育の位置

1) 戦後60年間の歩み

第二次世界大戦後、カイロ宣言により台湾は中華民国に返還され、その4年後の1949年に共産党に敗れた国民党が台湾に渡り、中華民国の臨時政府を樹立した。それまでのコミュニケーション手段は主に福建語、客家語そして日本語であったが、国民党政府は「中国人」としてのアイデンティティや言語政策を提唱するために、北京語（中国語の標準語）を公用語として普及、励行させた。その結果、それまで使用されてきた言語は公の舞台から退くことになり、特に元宗主国言語であった日本語は一掃されてしまった。半世紀に及び「皇民化」を強いられてきた台湾人であったが、日本に対して決して否定的な思いばかりではなかった。教育面においては差別があった¹²⁾ものの、近代教育の普及を促した業績や知識の指導に努力した日本に対しては敬意も表していた。魚返は、日本統治が終わってから20年を経た後も依然として、多くの人々が日常生活において、日本語を使っていたことという、その驚嘆さを当時の著名な書物の中で述べている¹³⁾。このような情緒をもつ台湾民衆と、中国大陸で8年間も日本と戦った¹⁴⁾後に台湾へ渡ってきた国民党政府の間では、対日感情の面で軋轢が生じた。結局、日本語、日本語学習はいっそう冷遇され、さらには日本に関するすべての情報が、ほとんどシャットアウトされて伝わってこない状況となった。蔡はこの時期（1947～64年）を「日本語教育の暗黒期」と称している¹⁵⁾。

1952年に日本と中華民国は講和条約を結び、両国の国交が回復して、経済、文化などの交流は再開されたが、日本語教育の担い手は公教育ではなく、民間語学塾（台湾では「補習班」という）に託された。ようやく1963年に私立大学である中国文化学院（現中国文化大学）が、今後の日本との交流に必要な人材を育成する目的で、台湾初の日本語文学コース（日文組）を設けた。しかし、それは英文学科などと同じ位置ではなく、あくまでも東

12) 汪知亭著、[1978年]、『台湾教育史料新編』、台湾商務印書館発行。

13) 魚返善雄著、[1965年]「台湾日本語教育の秘密」、『言語生活』、9月号。

14) 日中戦争1937～1945年。

15) 蔡茂豊著、[1995年]、「台湾における日本語教育50年史覚書」、『天理台湾研究年報』、第4号、p.98。

アジア外国語学科(東方語文系)という学科の中で、韓国語コースとともに設置されたものであった。ちなみに台湾の大学では「〇〇系」は日本の「〇〇学科」に当たり、「〇〇組」は「〇〇コース」を指す。学科名に「日本語」を使用しなかったのは意図的なことであったと思われる。その後、政府も日本語教育政策を緩め3校の私立大学が中国文化学院に倣って次々と日本語専攻コースを開設したが、いずれも似たような学科名称で、結局日本語は学科名に使用されなかった¹⁶⁾。

しかし、1972年に日本は中華人民共和国と国交正常化を宣言し、日本との外交を断った中華民国政府は高等教育機関に新たな日本語専攻の開設を許可しなくなった。十数年の間、日本語を専攻する高等教育研究機関は、上述の4つの私立大学に置かれただけだった。80年代に入って台湾の経済発展はめざましく、まさにアジアの奇跡と呼ばれ、国際経済に占める地位も上昇した。同時に隣国日本との経済の関わりも益々緊密になり、日本語はもはや不可欠なビジネス手段となった。また、当時すでに日本の大衆文化は非合法メディア¹⁷⁾を通じて普及しており、様々な情報の波が押し寄せてきた。それでも、大学における日本語学科の増設は依然消極的であった。

ところが、1987年に戒嚴令¹⁸⁾が解除され、民主化が進むにつれ、これまでの日本に関連した規制の多くが緩和された¹⁹⁾。これによって日本はますます身近になり、巷では日本製品が一気に増えて、そのセンスのよさが評価された。一部の日本語は若者のおしゃれ感覚を表現する手段としてもはやされた。このような状況で、政府も高等教育機関における日本語の人材育成が必要だと認識しはじめたのである。まず政治大学が1989年に、国立大学として初めての日本語コース(日文組)を設置した。政治大学はもともと1927年に中国大陸で創立され、1955年に台湾で再興されたトップクラスの大学である。これをきっかけに多くの大学が雨後の筍のように、積極的に日本語専攻課程を設けるようになった。台湾の最高学府である国立台湾大学も、ようやく1994年に国立大学としては初めて学科名に日本語を付した日本語学科(日文系)を設置した。周知の通り、台湾大学の前身は植民地時代に日本が作った台北帝国大学である。1928年に設立されたこの大学で、日本語が他の外国語学科と同様の正式な教育課程として認められるまで、約70年が必要であった。ちな

16) 淡江文理学院(現淡江大学)が1966年に「東方語文学系」を、輔仁大学が1969年に「東方語文学系」を、東呉大学が1972年に「東方語文組」を設置した。

17) ファッション誌、いわゆる「第4台」チャンネル(違法ケーブルテレビ)、海賊版音楽テープやビデオなどを指す。

18) 戒嚴令期間は1949～87年であった。

19) 例えば、1988年末に禁止されていたNHK衛星放送の規制が緩和された。更にケーブルテレビ局の開設が認められたことで1994年より日本のテレビ放送が見られるようになった。

みに2003年度の交流協会日本語センターの調査によると、日本語教育を実施している高等教育機関はすでに145ヶ所となり、学習者数は7万5千人に上っている²⁰⁾。

2) 外国語教育における日本語の位置

台湾の高等教育において、選択科目である第二外国語としての日本語学習は戦後の早い時期にすでに始まっている。しかし前述のように、堂々と「日本語学科」や「応用日本語学科」などの学科名を用いて日本語専攻者が育成されるようになったのは、社会の需要増大により制限政策が緩和された80年代後半のことである。ただし日本語学科の入試基準点は常に英文学科や中国語学科を下回っていた。ところが、近年の大学入試の合格点順位には変化が見られる。表1に、2005年に行われた大学入試における外国語学科の最低合格点と合格者数をピックアップして一覧を示す。国立大学の日本語学科は実質上2校しか募集していないことがわかる²¹⁾。ここでは、私立大学からは入学の難しい総合大学4校をサンプルとして取り上げ、それぞれ他の外国語学科と比較してみることにする。

表1 大学の外国語関連学科の合格点ベスト3 (2005年)²²⁾

大学名	学科名	最低合格点	合格者数
国立台湾大学	日本語学科	407.21	44
	外国語学科	385.52	75
国立政治大学	日本語学科	386.24	22
	英語学科	374.41	60
	韓国語学科	373.6	28
私立東呉大学	英文学系	362.92	160
	日本語文学系	291.84	146
	ドイツ文学系	284.23	50
私立輔仁大学	日本語学科	305.66	113
	英文学科系	264.33	45
	ドイツ語学科	227.25	46
私立淡江大学	ドイツ語学科	284.84	53
	英文学科	283.57	128
	日本語学科	266.18	123
私立静宜大学	スペイン語学科	160.29	85
	英語学科	152.52	131
	日本語学科	127.26	95

20) 平成15年度「台湾における日本語教育事情調査」報告書, [2004年], (財)交流協会より。

21) 国立高雄第一科技大学には応用日本語学科があるものの、元は職業技術専科学校であったため、職業高校卒業生向けの入試を取り、一般大学共通入試制度に加わっていない。

22) 台湾教育部統計処より。

結論から言うと、国立大学の日本語学科の定員は他の学科より少ないが、合格点数は他の外国語学科より高いレベルを求められたことが分かった。一概には言えないが、台湾では国立大学の合格基準は私立大学より厳しく設定される傾向がある。また定員が少ないのは、国立大学の予算不足によるものと思われる。一方で、サンプルの私立大学は国立大学よりは合格基準が低いものの、定員の平均は国立大学の3倍ほどである。80年代までわずか4大学しかなかった日本語コースの入試合格点数は、つねにその大学の英文学科を下回っていた。これは第二次世界大戦後にアメリカの文化や経済が台湾社会に多大な影響を及ぼし、多くの大学生がアメリカや英語圏国家に留学するなど、英語の需要度が非常に高かったからであると思われる。殆どの学生が英語を第一外国語として選択していた。しかし近年、日本文化に関わる規制の緩和によって大量の日本文化、日本商品などが入り込み、大学入試の改革、大学の増設、ビジネスチャンスの増加などによって、台湾の大学では戦後の英語ブームにも似た日本語ブームが起こったのである。表1を見る限り、日本語学科と他の外国語の合格順位に関しては、もはや規則性が見られない。各校の教育方針や政策の違いで、一部の大学においては日本語学科の人気が高く、外国語学科のトップに座っている現象がみられる。各々の大学がどのような基準で合格点を設けたかについての考察は、今後の課題としたい。

4. 最近の日本語学科の状況

1) 近年の傾向

この10年間、日本語学科が量的に増設されただけでなく、大学側にも色々な動きが見られる。高等教育機関の62.2%が積極的に日本の姉妹校と相互訪問し²³⁾、46.7%の学校は交換留学制度をもっていて²⁴⁾、短期留学制度で日本語能力の向上や相互理解に努めていることが窺える。また、インターネットの普及に伴い、日本語による情報管理学習はかなり重要視されるようになり、大学側はIT設備を整え、パソコンを有効に使用できるよう指導している。さらにどの日本語学科のホームページも、自己宣伝、連絡事項の掲示、情報公開の役割だけでなく、学ぶ側が学習しやすいように日本の最新情報を提供し、日本語学習をサポートするための様々な工夫を凝らしている。

23) 「台湾アンケート調査集計結果報告書」、『平成16年度日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究』、国立国語研究所、p.18。

24) 同23、p.16

日本語教育の方針も多様化している。表2に見られるように、70年代前後にいち早く日本語コースを設置した4校（下線部）や国立総合大学などは「日本語学科」という名称のままである。それに対して、新興大学や、技術指導が目的の専科学校などは、主に実務知識や職業訓練を行うカリキュラムを採用しているため、「応用日本語学科」や「応用日本語コース」という名前を用いている。

表2 高等教育機関における日本語関連学科の種類別（2006年）²⁵⁾

日本語学科	応用日本語学科	応用外国語学科・日本語コース
国立台湾大学	台中技術学院	中華大学
国立政治大学	真理大学	大仁技術学院
中国文化大学	大葉大学	中山医学大学
<u>淡江大学</u> （外国語学部）	淡江大学（技術学部）	慈济大学
輔仁大学	長栄大学	元智大学
東呉大学	南台科技大学	東方技術大学
東海大学	高雄第一科技大学	親民技術学院
静宜大学	景文技術学院	樹人医護専科学校
世新大学	屏東商業技術学院	慈惠医護専科学校
文藻外語学院	立德管理学院	中州技術学院
	銘伝大学	高雄餐旅学院
	育達商業技術学院	高苑技術学院
	義守大学	環球技術学院
	明道管理学院	呉鳳技術学院
	修平技術学院	
	南榮技術学院	
	開南管理学院	
	致理技術学院	
	致遠管理学院	
	和春技術学院	
	興国管理学院	

2) カリキュラムの特色

高等教育機関での日本語学習者は2004年度には75,242人であった²⁶⁾。日本語は英語に次いで二番目に人気のある外国語である。台湾社会においては、英語は国際人としての教養だけでなく、英語の出来不出来が将来の進路に関わるので、殆どの学生は必死に学習している。それに対して日本語はアジアの一員として、身につけておいた方がよい言語と意識されている。日本語や日本の製品は若者にとってカッコいい存在であり、また流行を表現する言葉でもある。ちなみに2005年度において高等教育機関に在籍している学生数は約

25) 日本語センターデータ, [2006年], 「日本語関係高等教育機関リスト」参考, (財)交流協会。

26) 「日本語教育国別情報2004年度—台湾」, 国際交流基金・調査研究データベースより。

129万人²⁷⁾だったので、17人に1人の大学生が日本語を学習している計算になる。はじめにでも述べたように台湾には約13万人の日本語学習者がいるが、高等教育機関、初・中教育機関、およびその他教育機関での人数割合は図1に示すとおり²⁸⁾であり、中でも高等教育機関における学習者数は全体のほぼ60%のウエイトを示している。

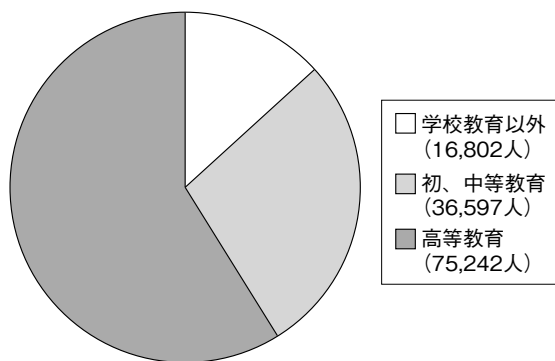


図1 台湾における日本語の学習者数

さて、表2においては各大学のうち応用日本語学科の多くは、商用会話、ビジネス実技など同じような内容のカリキュラムであるため、ここでは表1のサンプル校からそれぞれのカリキュラムの違いを考察してみよう。表3によれば、まず各大学の必修科目に関しては主に日本語能力を培うことが目的であり、大きな違いは見られなかった。しかし他方で、選択科目においては大学によって教育方針や重点目標に違いが見られる。

国立大学の選択科目には、ビジネス向けの商業日本語や秘書実務などの講義も設けられてはいるものの、全体的にはやはりアカデミックな傾向があり、政治大学には中等教育で実施されている第二外国語としての日本語の教員を養成するカリキュラムが設けられている。一方、いち早く日本研究学会を立ち上げ、また唯一博士後期課程を有する東呉大学や二番目に古く設立された淡江大学の場合、どちらかと言えば地味で保守的な科目が多く見られる。しかし輔仁大学の場合、設立が早い時期であったにもかかわらず、カトリック系大学の自由な校風のため、バラエティに富んだカリキュラムを設けている。その他、新設大学や、比較的新しく設置された日本語学科の場合、多様で個性的なカリキュラムをもつものも多く見られる。1999年に日本語学科を新設した静宜大学はその代表である。ビジネス日本語の指導はもちろん、観光ガイド養成講座から童話物語や日本語教育法などの科目まで設けられている。そのホームページに、「完璧なカリキュラムの実現を目指し・・・」と記載されていたのが印象的であった²⁹⁾。

27) 台湾教育部 (文部科学省に相当) 統計処より。

28) 上掲26) を基に整理したもの。

29) 同学科HPより、2006年5月10日アクセス。

<http://www.pu.edu.tw/~japan/index.htm>

表3 サンプル校の日本語カリキュラム

大学	必修課程	選択課程
国立台湾大学 日本語学科 ³⁰⁾	日本語, 会話, 作文, 文法, 翻訳演習, 文学講読, 日本文化, 日本語LL, 古典文学講読	日本歴史, 文化史, 現代日本状勢, 日本語教授法, ビジネス用語, 日中文化比較, 日本語情報管理, 日⇄英翻訳, 時事日本語, 社会言語学入門, 日本語修辞学
国立政治大学 日本語学科 ³¹⁾	日本語, 会話, 作文, 文法, 日本語演習	日本文化, 現代情勢, 地理, 政治, 経済, 社会, 名作講読, 新聞読解, 秘書実務, 翻訳実技, 日本語教育実習
私立東呉大学 日本語学科 ³²⁾	日本語, 会話, 作文, 文法, 翻訳演習, 名作講読, 応用文指導	日本歴史, 文化, 現代情勢, 地理, 日本物語, 新聞読解, 通訳実技, ビジネス用語, 日本語情報管理, 発音, 古典文学史
私立輔仁大学 日本語学科 ³³⁾	日本語, 会話, 作文, 文法, 翻訳・通訳演習, 文学史, 名作講読, 古典文学, 現代文学, 言語学概論	現在情勢, 地理, ワープロ演習, 日本式経営, 日本産業経済, 日本語教授法, 児童文学, 映画文化, 伝統芸能講座
私立淡江大学 日本語学科 ³⁴⁾	日本語, 会話, 作文, 文法, 日本史, 翻訳・通訳演習, 名作講読, 卒論指導, 日本語ワープロ練習	日本文学史, 文化思想史概論, 政治, 新聞読解, 日本産業経済論, 日本語教育実習, 日本語学研究
私立静宜大学 日本語学科 ³⁵⁾	日本語, 会話, 作文, 文法, 翻訳演習, 文学講読, 日本語LL	日本概説, 歴史, 政治・経済, 地理, 近代史, 新聞講読, 名作講読, 古典文学史, 日本語教育法, 童話物語, ビジネス文章指導, ビジネス用語, 観光ガイド演習, 通訳実務, 論文指導

30) 同学科HP・2001年度カリキュラムより, 2006年5月10日アクセス。

<http://ccms.ntu.edu.tw/~japanese/ja/j-ver/j-top.htm>

31) 同学科HP・2004年度カリキュラムより, 2006年5月10日アクセス。

http://140.119.172.157/j/j_program.htm

32) 同学科HP・2003年度カリキュラムより, 2006年5月10日アクセス。

<http://www.scu.edu.tw/japanese/>

33) 同学科HP・2005年度カリキュラムより, 2006年5月10日アクセス。

<http://www.jp.fju.edu.tw/>

34) 同学科HP・2005年度カリキュラムより, 2006年5月10日アクセス。

<http://jpweb.jp.tku.edu.tw/index.htm>

35) 同学科HP・2005年度カリキュラムより, 2006年5月10日アクセス。

<http://www.pu.edu.tw/>

5. 結論

歴史的に見て、台湾の日本語教育は世界の中でもっとも長く続けられてきた。その前半の50年間は同化を目的とした強制的な日本語学習であった。しかし、第二次世界大戦後、中華民国に復帰し、さまざまな政治の荒波に揉まれても、日本語教育はなお健在である。今回は高等教育機関における日本語教育の変遷と、その位置づけを分析した。相当なスピードで増加してきた日本語教育の専門機関が、役割を分担しながら、着々と未来の日本理解者や日本通を育てている様子が窺える。

また大学側では、初等・中等教育の第二外国語として需要が高まっている日本語の教員養成講座、慢性的に人材不足の日本向けのビジネスマン養成コース、あるいは日本をさまざまな角度から理解するための多様なテーマの講座などをつくっている。特に新設大学であるほど、社会の要求や学習者のニーズに応える形で、積極的に新しい科目を設けている。一方、伝統ある日本語学科の場合は、カリキュラムは保守的であるが、学術的な研究に力を入れている。

グローバル時代を迎え、高等教育機関における将来の日本語教育は、もはや教室の中の学習だけでは満足できないはずである。インターネットの普及は、情報を入手するうえで学習者にとって格好のツールを提供し、日本の情報もいち早くキャッチできるようになった。学ぶ側にとって、これが教養や知識だけで終わってしまうのは、誠に惜しいことである。大学側はできるだけ機会を設け、もっと積極的に日本の学生や日本人と交流を図れるようプランをつくるべきである。台湾の日本語教育に携わる高等教育関係者がいつも念頭におくべきなのは、台湾と日本が互いに良き理解者となり、尊重し合えるような隣人同士の関係を築くことであると考えている。